

沖縄・久米島におけるサトウキビ栽培の始まり

深山直子

1. はじめに

久米島を断続的に訪れるようになって、10年以上の月日が経つ。小さな島ながら、自然環境が多様性に富んでいると同時に、長い歴史が培った独自の文化があることに強い関心を寄せてきた。

島の住民と話をしている場合にも、この島のすばらしさに話題が及ぶことは多いが、その際にしばしば「この島は上等な米がたくさんとれることで有名だった」とか、「島のいたるところに豊かな水田が広がっていた」とかいった内容を耳にする。確かに、「久米島」は「米の島」が語源であるという説がある程で、稲作の長い歴史があることに間違いない[e.g. 仲原 1990: 79-106]。そして現在でも^{あざ}字によっては稲作の農事暦に基づいて、「シツマ」や「ウマチー」などと呼ばれる「伝統」的な儀礼が執り行われている[e.g. 上江洲 2007: 19]。しかしながら、島を歩き回っても水田は見つからない。目につくのは緑に広がる、あるいは刈り取られて土色を見せる、サトウキビ畑ばかりである。この現実を目の前で栽培されているサトウキビと、見えないけれどあたかも「基層文化」のように横たわる米との関係性を、素朴に不思議だと感じてきた。

この島ではいったいどのようにサトウキビ栽培がここまで普及するに至ったのだろうか。他方、なぜ稲作は衰退していったのだろうか。また、両者は単純に反比例の関係性にあったのだろうか。農業の変容に伴い、地形や生態系、そして住民の社会組織やライフスタイルに、どのような変容が見られるのだろうか。本稿を、このような大きな研究主題に対する取り組みの第一歩として位置付けたい。

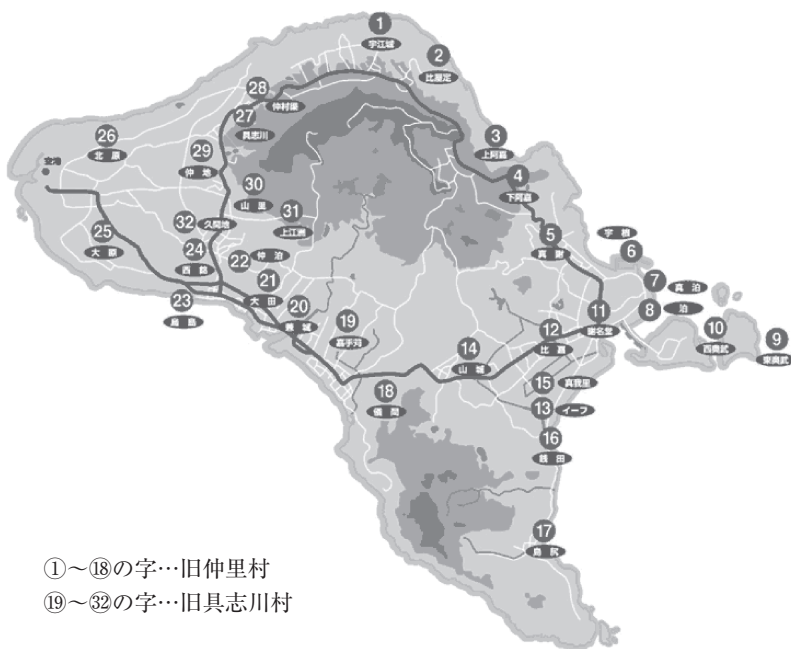
はじめに、久米島の概要をまとめる。次に、沖縄全体そして久米島のサトウキビ栽培の歴史を概観する。その上で、サトウキビ栽培が開始された大原という字の特性を、フィールドワークで得られたデータを軸に指摘する。

2. 久米島の概要

沖縄県島尻郡久米島町は、沖縄本島の西に位置する久米島本島と小さな島嶼からなる町で、



図1 久米島と沖縄本島並びに周辺離島の位置関係を示す地図
 [久米島町ホームページ「町へのアクセス」]より抜粋



- ①～⑱の字…旧仲里村
- ⑲～⑳②の字…旧具志川村

図2 久米島内の字を示す地図
 [久米島町ホームページ「行政区（各字）マップ」]より抜粋

総面積は約 64 km²である【図1参照】。平成 23 年度時点で人口は 8574 人、世帯数は 3850 世帯を数えている。ピーク時の 1950 年代に比べると人口は半減しており、過疎化と少子高齢化が進む離島のひとつといえよう [久米島町ホームページ「平成 23 年度産業の概況」]。

久米島は 1688 年頃に、行政区画として仲里間切と具志川間切に分割され、それらは明治 41 年（1908 年）に仲里村と具志川村に改称された。間切時代から数えて 300 年以上に及んだ 2 村体制は、平成 14 年に 2 村が合併して久米島町が誕生したことによって終焉を迎えた。しかしながら、現在でも住民は島を旧村で二分して捉える傾向が強い。

さらに、旧具志川村は 14、旧仲里村は 18 の字から構成されている【図2参照】。字は日常生活における政治・経済・社会・文化的単位として重要であり続けたため、今なお自立性が高く、高齢者を中心に住民もまたそれに対して強い帰属意識を有する場合が多い [e.g. 上江洲 2007]。

久米島では、農業が現在に至るまで重要な産業であり続けている。農業就業人口は、平成 23 年度時点で全体の 23.8% を占めている。土地利用の点でも、最も割合が高い山林原野に次いで、畑が 34.5% となっている。その畑の総面積の約半分を占め、出荷額という点でも圧倒的な 1 位になっているのが、サトウキビである。それに花卉、肉用牛、葉タバコ、野菜が続く [久米島町ホームページ「平成 23 年度産業の概況」]。

しかしながら、サトウキビ偏重の農業の歴史は、実はさほど長くない¹⁾。例えば、約 150 年前の明治元年（1868 年）は、具志川、仲里両間切において、耕地面積の 73% を水田が占めており [小川 1982:244]、文字通り「米の島」と言っても過言ではない状態だった。この時代、サトウキビ栽培はほとんど行われていなかったと考えられる。ところが現在では状況は逆転し、稲作は仲地という字にある僅かな棚田でしか見られなくなっている。

3. 沖縄におけるサトウキビ栽培の始まり

琉球王国のサトウキビに関して最も古い記録は朝鮮の『李朝実録』であると言われており、1429 年のところで触れられている [金城 1992 (1985):13; 名嘉 2003:19]。となると 15 世紀には既に、サトウキビが栽培され、製糖されていたことになるが、当時砂糖はまだ量産が難しい貴重品で、薬としてごく一部の人々に利用されていただけだったようである [名嘉 2003:22]。

1609 年に、琉球王国は薩摩藩に侵攻されてその支配下に置かれることになった。財政が圧迫されて、新しい産業開発が課題となるなかで、進貢使節として中国への渡航経験がある儀間真常は、中国に特使を派遣して新しい製糖法を学ばせ、1623 年にそれを沖縄にも導入した。いわゆる二転子三鍋法と呼ばれる方法で、二つの転子を噛み合わせてそれを牛馬の力で回転させることによりサトウキビを搾汁し、続いてそれに石灰を加えて三つの鍋で煮詰め

沖縄・久米島におけるサトウキビ栽培の始まり

るというものであった [名嘉 2003 : 35]。その後、サトウキビ栽培と新しい製糖法は各地に広まっていったと推測される。

製糖された砂糖はしばらくの間、主に薩摩商人によって、自由に売買されていたようである。しかし、琉球王府は薩摩藩への借金が重なった結果、1652年よりその返済の一手段として砂糖の専売制を実施し利益を上げようとした。そのために、砂糖奉行の下で砂糖の製造・販売が厳しく取り締められるようになった。王府の奨励があったために、換金作物であるサトウキビの作付面積は急増した。その結果、王府はむしろ食糧生産の減少を危惧するようになり、1697年にサトウキビの作付け制限をしいた。そのため伊江島を除く諸離島—久米島を含む—は、作付けが禁止される地域になった [金城 1992 (1985) : 18 ; 名嘉 2003 : 37-43h]。

明治12年(1879年)に廃藩置県が断行されて以降も、しばらくサトウキビの作付け制限は存続したが、県令により明治21年(1888年)に解除された [金城 1992 (1985) : 32]。

4. 久米島におけるサトウキビ栽培の始まり

さて、久米島におけるサトウキビ栽培は、明治14年(1881年)に具志川間切の地頭代・喜久里教宣が兼城で試作したことに始まると伝えられている²⁾ [久米島西銘誌編集委員会 2003 : 191]。喜久里は、サトウキビ栽培や製糖法の有識者として、沖縄本島から与那原寛端を雇用していたことから、長らく作付け制限がなされていた久米島において次第にサトウキビに対して関心が高まりつつあったことが伺える [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 165-166]。

明治18年(1885年)には、具志川間切の大原と呼ばれる地域で、沖縄本島からの移住者らによって、サトウキビ栽培が本格的に始められる。すなわち、喜舎場朝賢を中心とする旧首里士族10人、旧那覇士族10人によって結成された開墾社が、県内最初の士族授産事業として明治政府から資金貸与を受けて、大原での開墾事業に着手したのだ [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 66-69]。

この出来事は、沖縄の政治・経済・社会・文化的転換を如実に映し出している。すなわち、廃藩置県により沖縄が名実ともに「ヤマトユー」(大和世)を迎えて日本に組み込まれ、日本という単位における砂糖の需要拡大を背景に、サトウキビ栽培及び製糖業の拡大が喫緊の課題となった。さらに、廃藩置県は身分制度の廃止を伴ったために、王制を支えていた士族層は解体を余儀なくされ、上級士族を除く大半の下級士族は困窮化し、首里あるいは那覇を去って農村に生活の拠点を求めざるをえなかった。なお、時代の転換に翻弄された沖縄とりわけ士族の困惑は、明治16年(1887年)に開墾社が配布しようとした成員募集広告への反応にも見て取れたようだ。開墾社を先導した喜舎場が晩年に記した『東汀随筆続篇』におい

て次のように述べている。

「此の時、本県士族等、蔭に支那の援救を頼み日本に服従するを甘んぜず、また県庁に奉職するを肯んぜず、県官の保護を厭う。余輩が心志と大反対いたし、余輩等が開墾志願するに進んで嫉妬猜忌し、交際を断絶して天地間に身を容るるなからしむといえども、少しも屈せず撓まず、右の広告を調整して同志を募集し、但書の通り回達を求めしが、各村吏員等言を左右に托して之を差し戻したり。」[大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 78]

いずれにせよ開墾社は数年の準備期間の後に、沖縄県役人の監督員 2 人、開墾初期に労働を強要された囚人 40 人—数か月後に帰島している—を伴って、沖縄本島から久米島の大原に移住した [久米島製糖株式会社 1980 : 36]。先に触れた兼城で雇用されていた与那原もまた、大原に移動して指導にあたることになった [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 229]。

生活基盤をゼロからつくり上げた上で、サツマイモ³⁾を食糧として確保しつつ、サトウキビを栽培して製糖する、という開墾事業が過酷だったことは想像に易く、その過程では様々なドラマがあったようだ。例えば、苦労を共にした監督員の死去、新監督員と開墾社成員との対立、成員間の対立など、具体的なエピソードが詳しく伝えられている。来島の翌年から僅か 3 年の間に、開墾社から 11 名もの成員が退社したという [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 229]。

それでも移住の翌年には、サトウキビを収穫して製糖することに漕ぎ着けた【写真 1 参照】。漸次的にサトウキビ栽培と製糖業も安定していったようで、2 年後にはサトウキビの压榨機の石車を鉄車に取り換え、製糖の効率を上げている。そして移住から 6 年後の明治 24 年 (1891 年) には、開墾社での共同経営から個人経営に移行しており、農村として自立性を高めていった [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 : 229]。他方、明治 21 年 (1888 年) にはサトウキビの作付け制限が正式に解除されたこともあって、次第に島内の他地域でも、サトウキビ栽培が広まっていったようである [e.g. 久米島製糖株式会社 1980]。

明治 32 年 (1899 年) には、土地の整理事業として、本島の地租改正にあたるものが沖縄でも始まった。明治 36 年 (1903 年) には大原でも所在、地番、地目、地積、そして所有者が改定・登録され、各農家は名実ともに土地を所有するようになった。さらに、行政上では大原はそれまで字・上江洲管轄内であったが、明治 39 年 (1906 年) には字・大原として独立した。明治 43 年 (1910 年) には、集落一丸となって生産増量に並んで貯蓄奨励にも努めてきたことが認められて、島尻郡教育部会より表彰されて二宮尊徳の銅像が送られている



写真 1 大原に復元されている石車の圧搾機

2013年3月29日筆者撮影

屋根と塀がない状態で、棒の先(手前)に牛馬をつなぎ、牛馬が円を描くように歩くことで、石車が回る仕組みである。

[大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986:156-157]。これは生活にある程度余裕が出てきたことの証左でもあろう。

大正5年(1916年)以降には、沖縄本島や粟国島などからのいわゆる自由入植者も増加し、集落は100戸以上にもなった[大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986:231]。それに伴い統制が困難になったこともあって、大正9年(1920年)には防風林である長竹松林^{ナガタキマーチ}を境に、北部が北原として大原から独立した字になった。その後も移住者は増え続けたようで、大正末期から昭和初期には大原だけでも200戸を数えたという[大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986:158]。大原の内部では、おおよそ中央部、西部、南部という順番に開墾されていったようだ(2013年9月15日 大原住民K氏⁴⁾)。

さて、久米島の各字では一般的に家屋が集まって集村を形成する傾向があるが、移住者集落である大原・北原の場合は少数の家屋が集まる程度で、周囲は畑に囲まれて独立した家屋も見られる[e.g. ゼンリン 2008]。昭和に入って以降の人口推移は明らかではないが、昭和30年(1955年)を境に島の人口が減少傾向になるなかで、この地域も過疎化が進んでいる。平成25年時点では、大原の人口253人、世帯数103戸、北原の人口163人、世帯数75

戸を数えている [久米島町ホームページ「久米島町の人口動態（人口推移）データ」]。

5. 大原の特異性—戦前を中心に

(1) どんな土地だったのか

以上、大原の歴史について、入植期を中心に概観した。しかしながら先行の文献においては、入植先がこの地域であった理由や、この地域に決定するまでの経緯は、あまり明らかにされていない。

開墾社は明治政府に事業への支援を願い出る文書の段階で既に、沖縄県のなかでも「殊ニ久米島等ノ如キハ人口過小ニシテ荒蕪地最モ多シ。」と久米島に言及し、その「荒蕪地」で開墾計画を実施する意思があることを明らかにしている [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986：125]。また昭和43年（1968年）に住民の一人、本永朝輔は大原の歴史を書き留めており、移住の「其の前に県や移住計画者の幹部等が二、三回に亘り久米島に渡り適地選定の為各地検分調査の結果、現在の大原が最適地と決定」し、その後間切役所や所有する字と交渉を行い、当時の地頭代や住民の快諾を得て決定したとしている [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986：155]。現在の住民の間でも、移住者集落が形成されることは「県の意向」だったと説明され、そのことを巡って異論があったとか、もめたとかいった類の話は聞かない（2013年3月18日 西銘住民複数名）。

ところで、開墾社と県には開墾すべき「荒蕪地」として認識されていた大原であるが、島の旧来の住民にとっては、入植以前どのような土地だったのだろうか。旧具志川村は、その中央部に複数の字の集落が集まっている【図2参照】。大原は、その西部に位置し、村のなかでは中心から外れた周辺地域であり、上江洲、西銘、大田、山里、仲地の住民が権利を持つ境界的性格の強いところであった [大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986：154, 156-157]。

字のさらに下位の民俗地名を記した地図に照らし合わせた場合には、図3に示す斜線部がおおよそ大原地域に該当するという【図3参照】 [具志川村史編集委員 1976：482, 大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986：156-157]。その一つ大久保は、1800年代に牛馬そして畑耕作のために、用水を蓄える堀を造成したところだったと伝えられている [久米島西銘誌編集委員会 2003：310-311]。あるいは石新は、カルスト地形特有の琉球石灰岩の露出とその周囲に群生するソテツがみられたという [久米島西銘誌編集委員会 2003：311]。現在の住民に聞いても、この地域は上江洲や西銘がいわば「牧場」として「牛に長い紐をつけて草を食ませる」という形で利用していたところであると説明する。同時に石灰岩土壌の「やせ地」、「よくないところ」であり、水田はもとより畑としてもあまり活用されていなかったとのことである（2013年3月18日 西銘住民複数名）。

ここで、自然地理学的情報を参照してみると、まさに大原・北原が位置する久米島西端部が、島内でも他にない特徴をもっていることがわかる。まず地形は、隆起サンゴ礁から成る石灰岩台地で、カルスト地形がみられるところでもある【図4参照】[小川 1982, 国土交通省ホームページ「20万分の1土地分類基本調査及び土地保全基本調査(沖縄県)」。次に表層地質は基本的に琉球石灰岩で、海岸部は砂がち堆積岩となっており、島の大半が火山岩であることと対照的である。さらに土壌は、暗赤色土壌の一種の島尻マーヅであり、赤色土壌の国頭マーヅ、岩屑性土壌、グライ土壌である他地域と一線を画する[国土交通省ホームページ「20万分の1土地分類基本調査及び土地保全基本調査(沖縄県)」。なお、この島尻マーヅは、土層が薄く水持ちが極端に悪いことで知られる[仲田 2009:49]。

つまり大原は、土壌は薄く保水性が低い上に、地表には溶解した石灰岩が残存しているという点で特異な地域であり、耕作地としては相対的に条件の悪いところだったといえよう。積極的な働きかけはなされずに、牧草地程度にしか活用されてこなかったこともうなずける。つまり「荒蕪地」なるべくして「荒蕪地」だったわけであり、だからこそ住民の間で、移住者への移譲がそれほど問題化しなかったのだと推測される。

実際に、開墾時は土壌の石灰岩を取り除くことが困難で、取り除きようのない大きいものはそのまま残しておくほかなかったから、昭和53年(1978年)に開始した土地改良事業以前には、畑の形状はいびつにならざるをえなかったと聞いた。また、土壌の保水力が低いにも関わらず、河川がなく灌漑施設も整わない⁵⁾なかで、農作業は雨水頼りの「気象条件任せ」で、水不足に泣かされることも多かったという。この状況は次第に改善していき、特に平成17年にカンジダムが竣工したことにより農業用水の供給が安定したようである(2013年9月15日 大原住民K氏・T氏)。

(2) 他地域との関係性

以上みてきたようにその地理的特徴から、大原で生産できる農作物は限られていた。すなわち、サトウキビ、サツマイモ、大豆や落花生などの豆類、スイカ、タバコなどである⁶⁾。一方、旧具志川村の他字で生産されていた米や野菜類には向いていなかった。開墾した土地は限られ、それも基本的には「やせ地」だったこともあって、他字に比べて経済的に貧しい時代が長く続いたようである。

このことに関連して、旧具志川村に暮らす現在70代後半から80代の高齢者から聞いた昔の食べ物のお話が興味深い。戦前は、西銘、仲地、仲村渠、具志川といった字で米を収穫しても、それは基本的に物々交換や売却のためのものだったという。従って主食は3食サツマイモであることが多く、加えて少量の米とサツマイモやその葉などを入れた「おじや」をよく食べ、たまに米の「ごはん」を食べた、という人が多かった。ただし、3食に1食は米だったという裕福な家庭もあった(2011年2月 複数の字における老人会にて)。

一方大原では、3食サツマイモで、ごく特別の機会にしか米を口にしなかった。その米も、自分たちの土地では作っていないので、西銘や仲地などの字、ひいては旧仲里村の字と物々交換をし、米とひきかえに、サツマイモ、サツマイモを加工したでんぷん粉、大豆、サトウキビ、さらに水田の緑肥となる屋敷周りに植えたハイビスカスなどを提供したという。

また、西銘の裕福な家庭の高齢者からは広い田畑を持っていたために、大原・北原の住民がそこで「ヒヨウ」（日雇い）として働きその報酬として米を与えたという話や、大原・北原の住民に一部の田畑を貸しその小作料として「ヒヨウ」として働いてもらったという話も聞いた。作物が多く収穫できた際には、その一部を大原の住民にあげに行った記憶がある人もいた（2013年9月12日 西銘住民Y氏・M氏）。

おそらく、米が食べ物ヒエラルキーの最上位に置かれ、水田の面積や米の収穫量が豊かさに比例する、と少なくとも理念的には捉えられていた時代に、大原・北原は島内で最も貧しい字のひとつとして位置付けられていたのだろう。現在でも高齢者は、大原・北原を「カイクン」（開墾）、住民を「寄留民」と呼んで差異化する場合があるが、そこには「貧しいよそのもの」に対する微妙な「上からの」まなざしを感じ取れる。大原の70歳前後のある住民は、次のように話した（2013年9月15日 大原住民T氏）。

「かつて『カイクン』よりよく聞いたのが、上の部落の人々が私たちを呼ぶ際に使う『ハルヤー』、『ハルヤーチュングワー』という言葉だ。これは『畑をやるひと』、『畑に住むひと』という意味で、本人たちに意図はなかったかもしれないが、私自身は一種の蔑称だと思っている。それを耳にするたびに、悔しさを感じたものだった。…上の部落は教育熱心でプライドが高い。しかし当時大原は食べることに精いっぱい、教育など二の次で、子どもさえ起きてから寝るまで重要な労働力だった。学校で、着ているもの、弁当、学力などに差があることは否めなかった。弁当だって、あっちは米のこともあった。」

ここには住民の間で共有されていた、他地域⁷⁾と大原・北原の間にある、旧来の住民／移住者、高い土地／低い土地、稲作／畑作、米／サツマイモ、豊かさ／貧しさ、教育の高さ／低さ、といった対照性とその二者間に対する優劣という価値づけを垣間見ることができよう。

(3) 農業以外の仕事

さて、大原・北原の住民のなかには戦後に至るまで、土地が少ないために自給用のイモを確保することで手一杯で、サトウキビ栽培まで手が広げられないひとも多かったようで、「キビ畑よりもイモ畑の方が多かった」時代もあったという。かれらは、現金収入を得るため、集落を囲むシンリハマやマガイバマ等の海岸において、魚、エビ、タコ、海藻などをと

って、米と交換したり売ったりすることもあったという（2012年2月25日 大原住民複数名）。

さらに特筆すべきは、建材としての琉球石灰岩の切り出しという仕事だ。島内では、旧仲里村の宇江城、旧具志川村の鳥島、北原の海岸部に現在でも石切り場が残っている〔久米島町ホームページ「久米島文化スポットガイド」〕。なかでも、北原にある久米島空港北端の東側に位置する石切り場跡地は、規模が大きい【写真2参照】。ここではかつて、主に大原・北原の住民が、家畜小屋、屋敷の塀、墓等を建築するための建材として、岩石としては比較的柔らかい琉球石灰岩を切り出していた【写真3参照】。この石は現地では、「アワイシ」（粟石）、「ハーマイシ」（浜石）、あるいは単に「海の石」などと呼ばれており、また切り出した直方体の石は「チョーイシ」（丁石）とも言ったという（2010年2月20日・2013年9月16日 西銘住民F氏）。

大原の住民で、父親が石切りをしていたという男性に話を聞いた（2013年9月13日・2013年9月15日 大原住民T氏）。この作業は純粹なる手作業で、まず「カニボー」（金棒）と呼ばれる先端を刃のように研いだ鉄の棒を打ち込んで直方体の縦の面を切り離し、その後底面にあたる部分は、「イヤ」という金属製のくさびのようなものを差し込んで切り離したという【写真4参照】。大変な重労働で、2人で作業し一日2つ切り出せるか出せないか、という進み具合だったという指摘もある（2010年2月20日 西銘住民F氏）。また、夏場には日差しを遮るために、モクマオウを柱、ススキを屋根に用いて日陰を作って作業したこ



写真2 北原の石切り場跡地
2013年3月29日筆者撮影



写真3 アワイシを建材とする屋敷の塀（鳥島にて）

2013年9月16日筆者撮影

ともあったという（2013年9月15日 大原住民T氏）。約60年前まではやっていたというから、戦後も続いていたことになる。高温湿潤で台風が多い地域では、耐性が高い重要な建材だったのである。

なお、大原・北原でも石切りの経験がないひともおり、経済的に厳しく「なんでもやった」ひとたちによる「素人」の仕事と捉えられているようだ⁸⁾（2013年9月16日 西銘住民F氏・2013年9月13日 大原住民T氏）。なお、切り出した石を馬車で運んだり、それを用いて建築したりすることには別のひとが従事したという⁹⁾。ちなみに、大原の南東に隣接する鳥島の海岸部は、主に鳥島の住民が切り出していたところだそうだが、鳥島もまた移住者による新しい集落だ¹⁰⁾。つまり石切りには、土地の開墾や農業経営がなかなか難しかった人々が行う、「残余の仕事」という側面が少なからずあったのだろう。しかしながら視点を転じれば、農業の上では好まれない表層地質である琉球石灰岩を資源に変えるという、移住者たちの生活戦略だったとも捉えることができる。

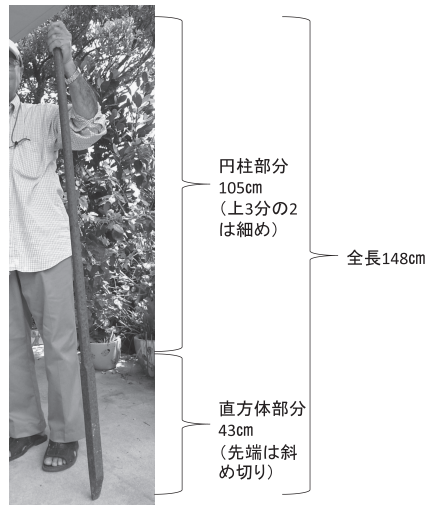


写真4 石切り道具「カニボー」
2013年9月15日筆者撮影

6. おわりに

冒頭にも述べたように、久米島は自然・社会・人文科学どの観点からも大変興味深い島で、先行研究も厚い。しかしながら、現在の基幹産業であるサトウキビ栽培に関する研究蓄積は少ない。固有の自然環境や独自の社会・文化に圧倒的な関心が寄せられるなか、それらの研究が手薄になってしまったり、無視されたりする傾向があることは、沖縄全体に対しても言えることだろう。しかしながら、島をサトウキビ栽培あるいは製糖業という視点から眺め直すと、これまで明らかにされてこなかったもうひとつの歴史や実態が見えてくる。特に久米島の場合は、サトウキビ栽培を始めた大原の特異性、そして他地域との対照性を切り口にして、島の固有性・独自性とその変容に関するミクロ並びにマクロな問題系に迫ることができ、本稿を通じて明らかになってきた。今後も調査研究を続行したい。

付 記

フィールドワークにおいては、久米島の住民、特に大原や西銘の皆さんには大変お世話になった。本稿は、平成24年度東京経済大学個人研究助成費、国立環境研究所との学外提携研究プロジェクト『平成25年度生物多様性と地域経済を考慮した亜熱帯島嶼環境保全策に関する研究』助成費によって可能となった調査研究の成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

注

- 1) 農業に関する過去の統計データの収集は、今後の課題である。
- 2) その具体的な理由や状況の解明は、今後の課題である。
- 3) 本稿では、一般的な名称としてこれを用いる。紙面の関係上この名称について、薩摩藩での栽培よりも沖縄での栽培そして普及の方が先になるため、サツマイモという名称に議論があることを指摘するに留めておく [e.g. 池原 1979]。
- 4) フィールドワークの日時とインフォーマントを示す。以下同様。
- 5) 開墾時に複数のため池を造ったが、あまり活用することはなかったという。
- 6) ただし、これらの作物に関しては適地だった。実際、サツマイモやサトウキビは、成長が早くはないが糖度の高さでは他地域より勝るといえる。
- 7) 島内には、大原・北原以外にもいくつかの移住者が形成した字がある。厳密には、それらを除いた「他地域」である。移住者集落間の関係性の解明や比較考察については、今後の課題である。
- 8) これに対し、火山岩である「クルイサー」（黒石）の切り出しは、専門的な職人の仕事だったようであるが（2013年9月16日 西銘住民F氏）、詳細の解明に関しては今後の課題である。
- 9) ただし西銘の住民で、墓大工である男性は、コンクリートなどの新しい建材が導入されるまでは自分自身で「ハーマイシ」の切り出しをしたという（2013年9月16日 西銘住民F氏）。
- 10) 徳之島の西にある硫黄島が明治36年（1903年）に噴火したため、郡及び県の方針として全島民が翌年までに移住したことによって形成された字である [具志川村史編集委員 1976: 623]。

参 照 文 献

- 池原真一 1979 『概説沖縄農業史』 月刊沖縄社
- 上江洲均 2007 『久米島の民俗文化—沖縄民俗誌Ⅱ』 榕樹書林
- 大原移住百周年記念事業実行委員会記念誌部会 1986 『大原移住百周年記念誌』 新報出版
- 小川徹 1982 「久米島民俗社会の基盤—水田造営形態と集落移動の関係について」 沖縄久米島調査委員会（編）『久米島沖縄—「久米島沖縄の言語・文化・社会の総合的研究」報告書』 弘文堂
- 金城功 1992（1985）『近代沖縄の糖業』 ひるぎ社
- 具志川村史編集委員会 1976 『久米島具志川村史』 具志川村役場
- 久米島製糖株式会社 1980 『久米島製糖株式会社20周年記念誌』 久米島製糖株式会社
- 久米島西銘誌編集委員会 2003 『久米島西銘誌』 翔コピーセンター
- ゼンリン 2008 『ゼンリン住宅地図沖縄県島尻郡久米島町』 ゼンリン
- 名嘉正八郎 2003 『沖縄・奄美の文献から見た黒砂糖の歴史』 ボーダーインク
- 仲田邦彦 2009 『沖縄県の地理』 編集工房東洋企画
- 仲原善秀 1990 『久米島の歴史と民俗』 第一書房

参照インターネット

久米島町ホームページ「行政区（各字）マップ」

- <http://www.town.kumejima.okinawa.jp/old/kaku%20aza%20syokai%20map.htm> (2013年11月14日時点)
- 久米島町ホームページ「久米島町の人口動態(人口推移)データ」
- http://www.town.kumejima.okinawa.jp/townoutline/population_transition_data.html (2013年11月14日時点)
- 久米島町ホームページ「久米島文化スポットガイド」
- http://www.town.kumejima.okinawa.jp/sightsee/culturalspot/culturalspot_all.html (2013年11月14日時点)
- 久米島町ホームページ「平成23年度産業の概況」
- http://www.town.kumejima.okinawa.jp/industry/general_condition_industry_h23.html (2013年11月14日時点)
- 久米島町ホームページ「町へのアクセス」
- http://www.town.kumejima.okinawa.jp/sightsee/town_access.html (2013年11月14日時点)
- 国土交通省ホームページ「国土交通省ホームページ「20万分の1土地分類基本調査及び土地保全基本調査(沖縄県)」
- <http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/20-1/47.html> (2013年11月14日時点)